
Sキャラ！

紗英場 渉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sキャラ！

【Nコード】

N2165H

【作者名】

紗英場 渉

【あらすじ】

牛乳瓶の底みたいに厚いメガネをかけた一見地味な主人公・淀橋千宗しちむろ。新学期を迎えたある日、同級生の北野吹雪きたのふぶきにその厚いメガネのしたにある、Sっ気の溢れかえった目を見られてしまい……！？

プロローグ

サラサラの髪はこれでもかって位まっすぐで、これでもかって位美しい金色だった。いや、単に色素が薄いだけなんだろうけど。

その色素の薄い少女は僕の腹の上に乗っかっている。つまり、馬乗りだ。新学期、僕も彼女もどこか急いでいたんだと思う。互いに勢いよくぶつかって、あろうことか僕の背中側に倒れ込んでしまったんだ。

おかげさまで、彼女の蝶のモチーフがついた髪飾りは外れ、僕の牛乳瓶の底みたいに厚いメガネも飛んでいってしまった。しかも僕はド近眼だから、起き上がった彼女を物凄い形相で睨むように見ているにちがいない。次に僕の目に飛び込んで来たのは、可哀想にきつと怖かったのだろう、顔を真っ赤にして涙ぐんだ彼女の姿だった。

「あつ……君、おーい」

そして最悪なことに、彼女は僕を怖い奴だと勘違いしたまま走り去ってしまった。そう、新学期のこの日こそが僕、よむほしちひろ淀橋千宗と彼女、きたのふぶき北野吹雪が出会った運命の日なのだ。

「おつす淀橋。そんな所にずっと座っていると迷惑だぞお」

つい先程涙目で走り去ってしまった彼女のことがショックで座り込んでいた僕は、友人朝山君の声がする方を力無く振り向いた。

「……」

「うわー、淀橋のメガネの下ってそんな顔してたんだ……ちょっと意外」

そりゃそうでしょう。いつもの僕はただの目立たないメガネ君だが、その下の顔は、切れ長でSっ気の溢れかえった目が腰を据えているのだから。

「ほらほら、メガネこんなところに置いてると誰かが壊しちゃっよ？」

「朝山君……僕が怖くないの？」

朝山君の反応があまりに他の人と違うから、墓穴を掘っているかもしれないとわかっていても、つい訊ねてしまった。

「んー。別に、だって顔が怖くても淀橋は淀橋だろ」

「……！」

淀橋のHPが回復した！ 安堵が5アップした！ 友情が5アップした！

「さ、行こうぜ淀橋。俺達今年も同じクラスだ」

「あっ、うん」

「あは、でもやっぱり俺、メガネの淀橋がいいわ」

「僕も」

僕と朝山君は笑いながら新しい教室へ向かった。

その眼はSである

「ええっと……俺等はC組だから」

僕と朝山君は、C組になった。階段からも、トイレからも離れすぎず、近すぎずの良い感じの位置だ。そんなことを呑気に考えていたら、どうやらクラスに着いていたみたいだ。

「おい、淀橋。着いたぜ。そっちはD組だぞ」

「あれ、ああ、そっか」

僕が朝山君に続き教室に入った瞬間、あの蝶の飾りが視界に飛び込んできた。

「あっ」

「……？」

思わず小さく叫んで指を指してしまいが、彼女は気付いていないようで、怪訝そうな眼差しを向けられた。

こうして改めてみると、先程の惚げ印象とは別に、内側に燃え上がるような強さを感じる。そう、まるで別人だ。

「どうしたんだよ淀橋。いきなり大きい声出してさ」

「いや、何でも、ない」

向こうが気付いてないならワザワザ知らせることもない。その方が、きつと僕と彼女の今後の関係のために良いだろうし。

「うーん、変な淀橋」

「あはは」

僕は誤魔化すように笑うと、朝山君がじつとこちらを見てきた。

「どうしたの、朝山君」

「や、淀橋はさ」

朝山君は少しだけ考えて話し出した。きつと言葉を選んでいいるのだろう。

「その、中身は社会的で良い奴だけど、見た目が……ネクラっぽいだろ」

「ああ……うん」

そういう部類のことを言われるのには慣れていたから、傷つきはしなかった、けど、朝山君がそんな事を言ったのは初めてだったから少し驚いてしまった。

「だから、さ」

朝山君の手が僕の方へ伸びて来る。ん？ 何だろ。良くわからないから、黙ってされるがままになる。

「あっちよっ！」

次の瞬間、僕の顔からメガネが外されていた。

「やрийい」

「朝山君……！ か、返せよう」

そして次の瞬間、教室中に笑い声が響き渡った。

「あははははは！ メガネ取った淀橋君の顔、ドSな顔付きの癖に、メガネ取られてフツーに拳動不審になってるんだもん！ ギャップ有りすぎだよ！」

あ……れ？ 誰一人、怖がってない？

「超ウケるよ！ 俺木田。よろしく！」

「あ……うん」

「あー！ 木田だけズリイよ！ 俺中川」

こんな感じで、次第に皆が集まってきて、僕はこれから、メガネが外れないように苦労することも無い生活が送れそうで、朝山君に何と感謝したらいいのかわからなかった。

でも、その時僕はすっかり忘れていたんだ。僕を見て教室で固まっていた彼女の存在を。

その美少女、S女

「淀橋千宗……」

新学期はじめの1日、僕はいつもと違うスタートをきった。きつとそれで、多少なりとも浮かれていたのだろう。

放課後、日直日誌を提出し終えた僕は、帰る間際に声をかけられた。それが彼女だなんて、全く気付かなかったんだ。

「何ですか？」

「何ですか、じゃないわよ。私よ、北野吹雪！」

「あつ、えつ。き、北野……！」

「気づいたわね？ さあて、朝の落とし前をどう付けてくれるのかしら、淀橋千宗」

彼女からは、禍々しいオーラが出ていて、やはりあの時感じた強さは、気のせいではなかったと思い知らさせる。

「お、落とし前？」

何についてだろう。ぶつかって倒れたこと？ でもあれはお互い様だ。

「北野だって、急いでいたはずだ」

「違うわ！」

「違うって、どういう事だ？」

「淀橋千宗、アンタ私の泣き顔見たでしょう」

「ああ……！」

そつちか。と納得してみる。そう言えば、あの時は随分儂げに見えるたっけなあ。

「ああじゃなあい！ アンタ……アンタなんか私の情けない顔、見られたなんて……許せないわ！」

北野は真っ赤になって言い放った。ちょっと、可愛い。

そして僕は気付いた。そうか。北野って。

「なんつうか、北野って強い自分が好きなのか？」

それは凶星だったらしい。北野は一瞬だけ動きを止めた。

「そう。そうよ。私は弱い自分なんて捨てたの」

確かに、北野は内側に強さを感じる。それが彼女を一層魅力的に見せているとも思う。

でも、何だかそれは北野自身を苦しめているような気がした。

「でも、僕は好きだ、北野の泣き顔。凄く綺麗だったと思う」

「は！？ 何言ってる……！」

僕は北野の目を良く見るために、メガネを外した。

「泣きたいときに泣ける強さ、あると思うんだ」

「……！」

決まった。カッコ良く決まったぜ。

「ううううふふふふ！」

「えっ」

カッコ良く決まったはず、なのに、目の前には涙目で笑う北野がいた。

「き、北野。北野ー？」

「はっは！ 千宗って凄く変ね！ 私はアンタが怖くて泣いたんじゃないの」

「ん？」

え、ちょっと待った。それが本当だったら僕。

「うーわー恥ずかしい！」

「私、もうアンタの目に萌えちゃって萌えちゃって」

萌え！？ え、萌えってアナタ。

「もー、ニヤニヤが爆笑しちゃうのよ」

「ええー……」

「だから」

北野は突然真剣な顔付きに変わった。

「だから？」

「千宗はそうやって毎日私を笑わせなさい。これが落とし前よ」
「……え」

放課後の教室で、夕日のオレンジ色が僕達を照らしていた。

「……って意味わからんし！ 作者綺麗に纏めるなー！」

淀橋千宗、DS発動（前書き）

今回から、DS発言満載です。従って下品な言葉や少し卑猥な表現が有りますので、閲覧にはご注意ください。

淀橋千宗、ドS発動

「ちーひーろっ！」

「はあう！」

ああ……またこのパターンだ。僕が家を出る 背後に殺気を感じる 背中に衝撃が走り、僕は踏みつけられる。

「や、やあ北野。おはよう」

「……おはよう」

北野はその顔を満足気に綻ばせ、僕を見下ろしている。これが、3日前から続く僕達の朝の光景であり、最早定番化しそうであるからそろそろヤバ目だと思う。

「くっはー やっぱりアンタをコンタクトにさせといて良かったわ！ その顔が歪むのって最高の味ね」

「そうですか……」

僕は北野が楽しかったらそれでいいんです、はい。

「さっ。学校行くわよ。遅刻したら、また踏みつけるから」

そう言つと北野は地面に倒れ込む僕をそのままに、ツカツカと歩き出した。

あれ、皆さんもしかしたら、僕が酷く哀れな奴か、ドMな奴だと思っけてないですよ。それは違いますよ……え？ どう見てもその2つ以外有り得ないじゃないかって？ 僕も昨日の朝まではそう思っけてたんだ。でも、僕は僕の中に居座る本物のドSを知ってしまった。それこそ、北野なんてめじゃないくらい。

確かあれは、3限が終わって、北野達と昼食を取っている時だった。

「うわっ！ 淀橋の弁当旨そうだな！」

「ありがとう」

「……」

「本当だあ！」

メンバーは僕、朝山君、北野、北野の唯一の友達の真鍋さん。北野の今日の昼食はコンビ二弁当だった。

「ええー。そうかな。これ僕が作ったんだ」

「尚すげー！」

「……フン」

「わああ！ 凄いねっ」

次の瞬間、北野が僕から弁当を奪い取り、一瞬にして全てを食べてしまう。

「……」

「あれ、北野さん？」

「美味しい……」

「ち、ちよっと吹雪、それはやり過ぎ！」

北野はニヤリと笑いこちらを見ていたと思う。その時、僕の中で何かが切れる音がしたんだ。

「……ぞ」

最初は小さな声だったらしい。でもそのオーラの強さに、教室中が気付かずにはいれなかった、と後に朝山君から聞いている。

「な、何よ。言いたいことがあるなら言いなさい」

これには流石の北野もビビったらしく、いつもよりは大人し目だった。

「着いて来いよ、北野」

「やだ、ちよっと、離しなさいよ！」

朝山君達はその場面までしか知らないらしく、その後の事は嬉しそうに顔を綻ばせる北野自身から聞いた。

あの後僕達は屋上へ向かったらしい。

「……何よ。千宗の癖に生意気椰のよ」

無理矢理屋上に連れて来られた北野は少し不機嫌だったけど、先程の僕の顔付きにSを感じ、少し期待の籠もった眼差しを見た。

「あ？ 犯すぞテメー」

「……！」

振り向いた僕が放ったのは、まさにSのセリフそのもので、僕の目付きは更に鋭く、Sの気に満ち溢れていたそうだ。

「ああー！ もうあの時の千宗ってば、格好良かったんだから！」

しかも北野は何故かそのドSが発動した僕に惚れたらしい。

「……………そうですか」

「ほらほら、アンタ、今日から私の弁当も作って来てくれたんでし
ようね？」

「うん」

「……………は、早く行くわよ！」

僕と北野は遅刻しないように、早足で学校に向かった。最も、僕の方が背が幾分高いので、少しばかり北野に歩幅を合わせてやらなければならぬのは、北野には内緒の話だ。

Sな彼女はお嬢さん

北野は、普段は普通の女子だ。女子と戯れる北野は、明るく元気で、人気者のようだった。

「北野って人気だよな」

「そりや当たり前だろ」

僕と朝山君はベランダで語り合っていた。

「……何で」

「だって北野ってほら、アパレル会社の社長令嬢であのトップブランドの設立者だろ」

そう言っつて、朝山君は北野の蝶の髪飾りを指した。北野の髪飾りは、その美しい髪の高サイドに付けられている。

「あ……何かあのマーク知ってるぞ」

「そ。女の子のブランドになんて疎い俺等でさえ見たことがあるブランドなんだよ」

「すげー！ 北野何者だよ。僕はファッションのことは良くわからないな。」

「あ……でもさ、淀橋はオシャレだよな。そのベルトとかさ」
朝山君につられて制服のズボンにはめられたベルトを見る。

「ああー。これは北野がくれたんだ。アンタ、私の隣を歩くならちやんとしたベルトをつけなさいよ！ ってね」

「ふうん。ところで、淀橋って北野と付き合ってたの？」

「ちがうよそれは」

僕達がそんな他愛のない会話を楽しんでいたときだった。

「よ、淀橋君危ない！」

僕達の下から、緊迫した声が……

「甘いわー！」

もの凄い勢いで僕の顎5センチ手前まで迫っていたバレーボール（固いやつ）を、僕は渾身の力で叩き落とした。

その下にはやはり、北野吹雪。

「千宗のくせにやるじゃない」

その態度は、酷く刺々しい。僕は北野をベランダと言う高さから思いっきり見下ろした。

「……………あ？」

そう、勿論ドS丸出しのあの眼（皆さん、これはマナコと読むのだよ）で。

周りの空気が凍りつくのを感じた。北野は一度目を逸らすと、小さな声で誤って来る。

「聞こえないな」

「ち、ちひろったら！」

北野は決心したように上を向いた。あ、ちょっとやりすぎたかな

……………

「かあっこいいんだから！」

ええー！？こ、こんなので喜んでくれるのかよ！

「あ、ありがとう」

そしてとりあえずニッコリ笑っておいた、んだけど。

「きゃあっ」

「淀橋君ってかあっこいい！」

「ステキ！」

何故か、その場で北野とバレエをしていた女子達が黄色い声を上げだしたのだ。

「えっ、な、何で？」

「淀橋よ……………」

朝山君が僕の左肩に手を置いた。

「お前、キレてる 때가 一番かっこいいぞ」

ああ。僕のSキャラは、意志に反して早くも定着しつつあるようです。

今回はS、ないです

「暑い」

「暑いですね」

「ちょっと、アンタもつと扇ぎなさいよ」

「扇風機買った方が早くないですか？」

僕達、今北野の家（豪邸）に来ています。

「扇風機？ 何それ。エアコンより涼しいわけ？」

「いや、何でもない……」

どうして突然北野宅にお邪魔しているかと言つと、それは昨日に遡るわけで。

「エアコンが」

「エアコン？」

「壊れたのよ」

「ざまあみるブルジョ……くはっ」

そう、つまり、北野の家のエアコン、正式名称エアーコントロールラー様々がぶち壊れたらしく。

「アンタ、明日エアコンになりなさいよ」

と言うちよつとズレた北野の命令に従っているわけで。

「あー！ もう、暑いつたらありゃしないわ！ こんの、千宗の役立たずエアコン！」

「だから、エアコンって言つより扇風機ですつてば」

「こんなやりとりが2、3回は続けられていた。

「もう。仕方ないなあ。アイス食べる？」

「アイス……？」

おお。良い食いつき方だ。ちよつとイジメてみる。

「いらぬかな」

「い、いる！ アンタが作ったのでも、少しは涼を得られそうだし
い？」

ああもう、この憎まれ口娘は。

「はいはい、どうせ北野は莓味でしょ」

「…………。そうよ、莓味」

「今日はバナナ入れてみる？　これが案外いける」

「うん」

僕がキッチンにいる間、北野は暇だったらしく、暫くしてベランダから北野が降りてくる気配がした。

「もうすぐだから、待ってて」

「暑いわよー。退屈よー。構いなさいよー」

まるで子供みたいにグニヤリとダイニングテーブルに突っ伏した北野を見て、自然と微笑んだ。北野って、実は元々の性格はキツくないと思う。

何回か交流があってわかったけど、北野の家はいつ来ても北野以外に人がいたことがなくて、きつと北野自身が強くなる必要があったはずだ。それが今の彼女の美学に影響しているし、だから、あんな態度を取ってみたい、あんな口調で話してみたりして、自分を強く見せている。

「北野、アイスできたよ」

「ん…………」

「北野、溶けちまうぞ」

眠そうにしている北野の頬に、冷たいであろう、アイスの入ったガラスの皿をくつつけた。

「つつつ、めた！」

「あはは」

「な、何笑ってんのよう！」

「あはは」

「千宗のくせに！」

「あはは、北野カワイイね」

「…………つ！」

あ、やっぱり女の子はカワイイって言われるの、嬉しいんだ。北

野は、顔を真っ赤にした。

「リンゴみたいだ」

「アンタが、変なこと言うから」

「だってカ……」

「わかったから！ 私がカワイイことくらい、知ってるわよ！ 美人なんだから、私！」

そうじゃなくて、僕は北野の中身が魅力的なんだと思うんだけどね。多分、北野は気付いてないのだろう。

このあと僕達は、作りすぎたアイスを、頭が痛くなるまで食べ続けなくてはならなかった。

今回はS、ないです（後書き）

遅れて申し訳ないです。本当に済みません。

SはSらしく断るもんだ

最近、頻繁に一緒にいるからか、僕は北野と付き合っているのか、と聞かれることが増えた。

中には、勢いで僕に告白してくる子もいて、僕としては少々困る。僕は別に男女交際に興味はないのだけれど、北野の側で彼女を見ていたいとは思ってから。それは、恋という言葉に似ているし、全く違い、彼女をからかったりするのは至極楽しいと言う、僕に最近芽生えたS的な感情でもあった。

「北野は聞かれない？」

「な、何それ！ はじめて聞いたわ！」

北野は顔を真っ赤にしている。僕は本当に何と言われようが、何も感じないんだけど、北野はやっぱ女の子だから違ったみたいだ。……迷惑なら弁当とか止めるけど」

北野にそれができないとわかっていながら聞いてみる。

「いや……お弁当はいる」

「大丈夫？」

「ま、アンタならいいわ」

アンタならいいわって意味深だな。よくわからないのでスルーすると、少し不満げな北野の表情が見れたので、得したなと思った。

そう言う話をしていた矢先、僕はクラスの女の子に話しかけられた。

「あの……淀橋君はさ、その、北野さんと……」

「それ、違うから」

またか、と溜め息をつくくと、訪ねてきた女の子をビックリさせてしまった。

「う、ごめんね！」

「え？ ああいや、こっちこそごめん」

取り敢えず、笑顔笑顔。女の子は機嫌を直してくれたみたいで、

ニコニコ笑ってくれた。

「淀橋君……私、淀橋君が、好き」

で、このパターンだ。なんかあのバレーボールを叩き落とした日から、告白される機会が増えたと思う。

「ありがとう……でもぼ……」

「な、ななな何よそれー！」

でもこの日はそのパターンが崩された。今まで北野本人が出会すことはなかったんだ。

「北野さん!？」

「よう北野」

「……」

北野はあまりの衝撃に、言葉が出ないのか、口をパクパクしている。ちよつとカワイイ。

「よ、ようじゃないわよ淀橋、アンタ何告白されてるのよ！」

「はじめてじゃないけど」

「なっ……」

挙動不審な北野は置いて、僕と女の子は話を進める。取り敢えず説明とかは、その後だ。

「あの……淀橋君、返事は……」

女の子は北野と言う邪魔が入ったものの、めげずに詰め寄る。健気でカワイイ。でも、僕には北野がいるからなあ。彼女とか作ったら、また北野が一人になっちゃうしな。

「あー……僕今はそう言うの興味なくて。ごめん」

「そっかー……」

振られると落ち込むのは当然で、女の子は泣きそうな笑顔 だった。この瞬間がいつも、苦手だ。

でも、大抵女の子って強くて、そのまま笑顔で去っていくんだ。ある先輩に何でだろって聞いたら、自分で考えるイケメンって言われた。先輩も最近イケメンになったのに。それは良いとして……

「さて」

さっきから固まっているちっこいのを見てみた。

「きたのー。おい、帰ってこいよ」

口を金魚みたいにパクパクしてる。うーん、北野には今のは刺激が強かったかな？

「取り敢えず、ワック行かない？」

僕は未だに固まって動かない北野の石みたいな体を引きずってワックに向かった。

SはSらしく断るもんだ（後書き）

更新遅れています。スランプになっております。まことに申し訳ない。次もいつ投稿できるかわかりませんが、出来るだけ早く、そして必ず完結させますので、お気を長くしてお待ち下さいませ。本当に申し訳ない。

Sを先輩に披露する

「ほら北野、ちゃんと歩けっつてば」

石みたいな北野を引つ張りワツクを訪れると、良く知った先輩の顔があつた。

「……泡沫先輩」

「ん？ あ、淀橋」

泡沫先輩はいつものごとくヘラツと笑つた。入学いらい久しぶりのその笑顔は、最近増えたメガネと言うアイテムによつて憎いくらいにカッコいい。

泡沫先輩は僕の中学の部活の先輩だつた。たしか、メガネがなかつた頃は凄い普通の、何の特徴もない先輩だつただけど、僕が入学したところには、萩本先輩と言つめちやくちやくカワイイ人が彼女で、原田先輩と言うこれまためちやくちやくカッコいい人が親友という、後輩からも一目置かれる存在になつていた。

「あれえ、その子は、最近噂の淀橋の彼女っぽい後輩じゃないか！」

「違います」

「違うの？ あ、もしかして先輩!？」

「そこじゃねえよ」

「あはははは！」

「原田」

「杏ちゃん誰その子！ まさか浮気!？」

「ゆりかストップ。これ淀橋の彼女」

「だから違います！」

そんな掛け合いを続けていたら、北野がようやく正気を取り戻した。

「ファーストフードは……食べないわよ」

「いきなりそれかよブルジョワ。張り倒すぞ」

一瞬にして泡沫先輩達の空気が冷え固まるのを感じたけど、それ

は無視して、今回だけは特別に北野のために上斜め45度の角度から見下ろしてやった。

「へへー……カッコいいわねチクシヨウ」

「うぜえんだよ」

そのまま軽くどつくと、嬉しそうに頬を染めた。

「えーと、淀橋？」

「何すか、先輩」

戸惑う様子を見せる泡沫先輩の方を、有りつ丈の爽やかな笑顔で振り向いた。

「何か、そんなキャラしてたか？」

「やだな先輩」

僕は笑顔を持続させながら言い放った。

「高校デビューって言うでしょ」

相変わらずだけど、原田先輩は大爆笑していて、萩本先輩はまだ泡沫先輩を疑い続けていた。

「……ま、お互い色々変わったね」

そう言って泡沫先輩はヘラツと笑った。癒やしの笑顔だ。

でも僕は泡沫先輩の許容範囲が広がり過ぎたのが一番の変化だと思えますよ。ま、宣伝するつもりじゃありませんが、どこかに泡沫先輩の過去が描かれた小説があるとか、ないとか。

Sを先輩に披露する(後書き)

たすけてー……文字数が少ないですよね

Sの悩み事

それは夏休み前のことだった。

「あの……北野さん」

北野に、男子からお呼びがかかった。僕の知らない奴だ。北野はソイツの名前を呼んでいたから、きっと去年同じクラスだったか位の、クラスメートなんだと思う。

だけど、呼ばれたその日から今日までの2週間、北野は放課後になると僕に何も告げずにどこかへ向かってしまうようになった。どうやらあの男子と会っているらしい。

何故かはわからないけど、僕に隠したいらしい。でも本当のところは北野がソイツと一緒にいるのを僕は一度だけ見てしまっていた。何を隠しているんだ？ 別に、北野に彼氏が出来たとしても僕に隠す必要ないだろ。

不本意ながらも北野の事で頭がいっぱいだったから、背後から接近する泡沫先輩の存在に気付かなかった。

「お？ 淀橋、今日1人か」

「うわ、泡沫先輩ですか」

驚きでゆるんだ顔を、咳払いをして整えて、先輩の質問を頭で復唱した。

「2週間は1人です」

「ふうん。今からワック行くけど、来るか？ 雅樹達とそこで待ち合わせなんだよ」

「萩本先輩がいるなら行きます。どっかの金髪より数倍カワイイし」
泡沫先輩が微笑んだように見えただけけど気のせいってことで。

「よう杏佑……と、淀橋君？」

「こんにちは」

僕達よりもいち早く、原田先輩がワックでポテトをかじっていた。ただポテトをかじっているだけなのに、妙にカッコいいのはもう、

お約束だ。

「おう、で、吹雪ちゃをは？」

「北野がどうかしましたか？」

「あれ、なんかオレ不味いこと聞いたかなあ」

「まあまあ、シエイク奢ってやるからさ、淀橋。機嫌なおせよ、な？」

「……ありがとうございます」

泡沫先輩は爽やかな笑顔を浮かべた。おお、店内の女子がみんなこっち見てるー。ま、泡沫先輩と原田先輩のコンビなら当然か。

そんなことを考えていたら、すでに注文を終えた泡沫先輩がシエイクを運んで来てくれた。

「美味！ 僕の好きな味覚えてくれたんですね！」

「まあな」

中学時代、一番仲良くしてくれたのが泡沫先輩だった。でも、そのなかでも一緒に何かを食べに行っただのはほんの数回のはずだ。

「泡沫先輩が友達が沢山いるわけがわかりますよ」

「え？ 何で？」

「杏佑は細かい所に気が付くんだよな」

「そうなの！」

「うわっ。ゆりか！」

「よー萩本」

「萩本先輩」

突然サーモンピンクの髪が視界をちらついたりしたかと思うと、そこには萩本先輩が立っていた。立っていた……んだが、微妙に泡沫先輩の影に入ってしまったって、頭しか見えない。

「あ、ちよつとお。杏ちゃん背が高いのよう。ゆりかが見えないっ！ 縮んで？」

「無理だろ」

萩本先輩独特のボケ(?)に鋭く突っ込んだ泡沫先輩を見て原田先輩が大爆笑した。

この3人は多分お互いが必要な物を満たしているから上手くいっているんだな。

僕と北野は……もう、北野に僕は必要ないのかもしれない。

「おい、淀橋君？ 顔色悪いぞ？」

そんなことはいさ知らず、萩本先輩がそのカワイイ顔で覗き込んできた。

「……う」

「え？」

「北野のM野郎」

僕は勢いよく彼女も好きな苺味のシェイクを啜った。

Sの悩み事（後書き）

お疲れさまです。頑張って更新します。

やっぱりこの人がSじゃなきゃ

「それはまた……」

「僕は別に北野に彼氏ができたっていいんですよ。でも、コソコソされるのがマジムカつくんです！」

僕は2杯目になったシエイクを感情の赴くままに啜った。

「つつか、淀橋君と北野さんって付き合ってたのね」

「そんなんじゃないです。そうですね、例えるなら、先輩達みたいな感じですかね」

「あ……わかるわかる。なんか一緒だと居心地良いんだよな」

原田先輩が、ポンと手を打った。

「私と杏ちゃんがデートするとき、必ず原田君呼ぶしね」

いやそれは何かもうデートじゃねえよ。

「あー、でも聞いてもらえて良かったです。僕と北野の問題ですから、先輩方はあまり気にしないでいいですよ」

これは僕と北野の問題だ。先輩達にこれ以上迷惑はかけられないしな。

「ま、確かにオレ達には何もできそうにねえな」

原田先輩は、眉根を寄せて心配顔の泡沫先輩に相槌を求めた。

泡沫先輩は、納得行かない様子で数秒間黙っていたけれど、直ぐに笑ってこう言ってくれた。

「でも、無理はしちゃダメだぞ、淀橋」

「ありがとうございます」

しみみりした空気を吹き飛ばすように、萩本先輩が僕の肩を強く叩いた。

「ささ、ゆりかがアボガドバーガー奢ってあげるよお」

「そ、そんな！」

「いいよ、遠慮しないで。杏ちゃんのカワイイ後輩君ですもの」

「萩本先輩……」

しかし、このとき僕の内側には何かがうごめいていた。

「うんうん」

「んなことくらいでなつくかよ」

そうなのだ。ついいつもの癖でSが出てしまったのだ！ いくらウケがいいからって、流石に先輩にこの態度はないだろ！ 僕のバカ！

「……………」

気まずい数秒の沈黙は、萩本先輩のそれで破られた。

「……………かあっこい〜い！」

「ゆりか!？」

「あはははは」

焦る泡沫先輩と、爆笑する原田先輩。訳がわからなくて、僕は啞然としてしまう。

「いやー。カッコいいね、淀橋君！ ゆりか、ちょっとビックリしちゃった！」

「くはははははっ」

「ええー……………ゆりか、僕がいるだろう？」

ちよつと泣きそうになっている泡沫先輩にあやまる。

「すみません。つい、癖でして」

「いや、いいんだよ！ その、凄く……………カッコいいし。僕も憧れちゃっよ」

「そんな……………」

そんな会話をしていたときだった。

「ちよつと千宗、何してんのよ！」

聞き覚えのある声は怒りに満ちていて、次の瞬間、背中に衝撃が走った。一気に視界が反転する。どうやら、僕は頭を床に叩き付けられたみたいだ。多分、足で。

見上げるとそこには、とてつもない黒いオーラを纏った般若みたいな北野が立っていた。

Sキヤラ崩壊

それは夏休み前、放課後のワック。

「……北野」

「何よ」

「お店のお客様方が驚かれ……いたたたた！　んにすんだよっ！」
「黙れ。腐れ」

僕こと、淀橋千宗は北野吹雪に足で頭を踏みつけられていた。

「こんの、M野郎！」

必死の形相で今まで放って置かれた憎しみをこのコールドアイズに込めて睨みつける。

しかしそれは逆効果だった。

「……うっ。何よ、萩本先輩にデレデレしちゃって」

「いや、してないだろ」

どうやら北野は僕がSを發揮することを口説くことだと捉えているようだ。どんな考え方だよ全く。ま、ヤキモチ？　を妬いている北野はちよつとカワイイんだけど。

「アンタは、私のでしょ」

そう、カワイイから、そんなことを言われたらもつと苛めたくなるのが僕達Sの性なんだ。（僕はまだ初心者なんだけれど）だから出来るだけ冷たく言い放った。

「……違いよ」

「……千宗？」

「僕は北野のオモチャじゃない」

「な、何言ってるのよ！」

焦る北野はなんだか、凄くカワイイ。そして僕はカワイイ北野が見たい。だから益々エスカレートしてしまう。

「だから、早くその足、どけるよ。うっとおしいんだよ」

「なっなによ」

北野の目が潤む。濟まん北野！ これも皆僕をSにした北野のせいだ！

泣いても知らないぜ。

「……ふふ」

泣いても知らない……

「かあっこいゝい」

「やっぱり!？」

そうなってしまふのが、この話の醍醐味だ。

それはそうと、僕は北野に聞かなければならないことがあった筈だ。

「大体、北野さ。あの男子誰な訳？ 僕今まで北野が黙ってアイツに会ってたの知ってたよ」

「淀橋……」

泡沫先輩が僕の名を諭すようによんだ。

でも泡沫先輩達には悪いけど、ここは空気なんて読めるはずもない。

北野を睨みつけたが、意外な反応が返って来た。

「なあーんだ。槇のこと」

北野によると、槇と呼ばれた男の正体は、槇智樹と言って、北野の手掛けるファッションブランドと、今度コラボレーションを企画しているメンズブランドのデザイナーだった。

「は……え？」

僕は衝撃の余り、固まっていた。北野が言ったことが本当なら、ただの独り善がりだ。僕のキャラじゃない。

北野は少し驚いて見せたが、次の瞬間に、かなり魅力的な笑顔を見せた。僕の頭を蹴り倒したときの表情にそっくりだ。

「つつか、なあに、オモチャって。アンタはその」

北野は一度言葉を切って、決心したかのように顔を上げた。

「彼氏……とかじゃないんだ？」

北野の顔は真っ赤になっていて、僕は自分の頬にも熱が集まるの

を感じた。

けど、ああコレは北野のなりに精一杯頑張ったんだな、って考えたら、答えは一つだとわかった。

「北野が望むなら」

僕の顔はと言つと、この時ばかりは緩んでいて、だらしなくて、こんな表情ならば北野に前言撤回されそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2165h/>

Sキャラ！

2010年10月8日15時51分発行